

令和3年度琉球大学法科大学院

A日程 未修者コース 入試問題

記述式試験

令和2年8月30日（日曜日）

10時00分～10時45分（45分）

注意事項

試験開始の合図があるまでに、次の注意をよく読んで、間違いのないように受験してください。

- 1 この試験では、問題冊子1部、解答用紙1枚、下書用紙2枚を配布します。試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 2 試験開始後、問題の部分に印刷不鮮明、汚損等があれば直ちに申し出てください。
- 3 解答は、必ず解答用紙に記入して下さい。解答に用いたすべての解答用紙の所定欄に、受験番号、氏名を記入してください。
- 4 黒色または青色であれば筆記用具は問いません。ただし、鉛筆書きの場合は文字が薄くならないように十分注意してください。
- 5 試験開始後は、途中退席できません。用便を希望する際は手をあげてください。
- 6 試験終了後、解答用紙を回収するので、指示があるまで席を立たないでください。
配布した解答用紙は、書き損じや未使用のものも含めて、すべて回収します。問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。
- 7 その他は、すべて監督者の指示に従ってください。

〔問題〕 アリストテレスが紹介したとされる「三段論法」の例は次のようなものとされている。

- ・大前提：全ての人間は死すべきものである。
- ・小前提：ソクラテスは人間である。
- ・結論：ゆえにソクラテスは死すべきものである。

この「三段論法」の形式を踏まえて、次の【一休に関する逸話】を読み、末尾の設問に答えなさい。

【一休に関する逸話】

店の前の橋を一休が渡ろうとすると、「このはしわたるべからず」と立札に書かれていた。しかし一休は、「この端（はし）渡るべからず」と切り返し、橋の真ん中を堂々と渡った。

〔設問〕 上記の逸話における一休さんの立場に立ち、その主張を、問題文中の「三段論法」の形式に沿って記述した上で、そのように記述した理由を説明しなさい。

【採点基準】

1. 「三段論法」の形式に沿った記述ができていること（15点）

<記載例>

- ・大前提 橋の端以外は渡ってもよい。
- ・小前提 橋の真ん中は、橋の端ではない。
- ・結論 橋の真ん中は渡ってもよい。

*上記の記載例と全く同じである必要はない。問題文に記載された「三段論法」の例から、大前提が抽象的な命題（ルール）であり、小前提がこれに該当する具体的な事実であり、結論が小前提を大前提にあてはめた事実であるという論理構造を理解していることが求められる。

この構造の全部ないし一部が理解できているのであれば、「大前提」に書くべき内容を小前提の欄に記載したりしていても、適宜得点を与えてよい。

もっとも、「三段論法」として記述すべき内容の中に、「理由」として記載すべきものが記載されている答案については、低い評価とせざるを得ない。

2. 1のように記述した理由を述べていること（15点）

「このはし」という言葉をどのように考えられるべきかが問題となっていること、及び、「このはし」という言葉を「この端」と考えるべきことの理由が述べられていることが求められる。

*なお、問題文に記載された事実及びその事実から合理的に推論される事実以外の見識をひけらかそうとするような答案については低い評価とせざるを得ない。

*以下の記載例は法学入門の教科書を読んでもらった前提での出題に関するものなので、その理由についての合理性が説得的に述べられていれば評価する。

<記載例>

橋はそのままでは渡ることが不可能ないし困難な2つの地点を結ぶ往来の道具であるから、渡ることを禁ずると解釈するのは不合理である一方、橋の端を渡ることを禁ずることは、転落の危険に照らして合理的といえる（限定解釈の根拠）。

よって、「このはし」とは、「橋の端」をいうと解する。

とすれば、「このはし渡るべからず」という立札の表示は、「橋の端を渡ってはならない」ことを意味すると解する（限定解釈）。

その反対解釈により「橋の端以外は渡ってもよい」ということができるし、かつ、そのように解することが、上述の橋の本質に照らして合理的である（反対解釈とその根拠）。

したがって、橋の端以外は渡ってもよいと解する（解釈による大前提の確定）。

一休が橋の真ん中を通る場合、橋の真ん中は、橋の端以外の場所である（小前提）。

以上より、一休は、橋の真ん中を通ることにより、この橋を渡ることができる（結論）。

3. 法的な思考力の土台となる論理的な思考力を備えているか、これを備えることのできる素養があるかどうか、を総合的に評価する（15点 裁量点）。

事柄の性質上、センスや将来性等を対象とする主観的な評価とならざるを得ないが、一つの方法として、A・B・C・D・Eの5段階に分け、それぞれの指標を+つき、ノーマル、-つきの3段階にさらに分け（このやり方によると、たとえば、A+は15点、Aは14点、A-は13点となる）。